

22 衿巾と衿腰の数理的關係及び、作図に対する一考察（第2報）

名古屋市立女子短大 住田八重子

1 衿幅と衿腰の關係を数理的に考察し、科学的に被服構成を指導するための一試料に供するため、及び種々な開衿えりの作図をする場合の便宜に資するため、第1報に引つづき考察をすすめたものである。

2 第1報に於ける原型の衿に關係のある各部を更に検討し、これに基いて衿腰1糎から8糎まで、折返り線第1第2第3第4の各線、持出し1糎から10糎まで、衿幅をそれぞれの衿腰に於て肩幅までとし、以上の条件に適合するようノモグラフを考案し、作図上の倒しの數値を求めた。実物作製（衿腰1糎から8糎まで、持出し1糎と7糎とで16糎により着用觀察した、なお以上のデータをを用いて製図した場合、頸廻りの太い細いによって生ずる作図上の誤差の許容範圍をも併せて考察した。

3 衿腰、衿幅、持出し、折返り線止り、等4つの要素が互いに交錯して4800種の數値を示したが、この場合肩線と折返り線と交って生ずる角度を三角函数により計算した結果、最大127.7度最少69.5度を示し表の上に興味深い關係を示した。衿腰と衿幅の關係に於ては最大の倒し43.2糎、最少の倒し0.4糎を示した。頸廻りの寸法差に依って生ずる誤差に対しては、34糎から38糎までは表の數値を使用し得るが、この場合に於ても、衿腰1糎乃至2糎の場合、衿幅の特に広い場合は誤差が大きくなるから、頸廻り35糎36糎以外の場合は表の使用に際しては一考を要する。